

# 密の回避が肝心

## 開催大会 必死の対策

秋晴れの9月22日、真駒内公園・屋外スタジアムをスタートゴールに札幌・豊平川トライアルマラソンが開かれました。新型コロナウイルス感染症で、春のシーズンイン以降すべてのランニング大会が中止となってから、国内で開催された初のフルマラソンでした。

主催は月刊ランナーズ発行や大会検索・申し込みサイト・ランネットで知られるアールビーズ。運営を担当した北海道事業所の沼田英隆さんは、実現までの道のりや取ったコロナ対策をこう話してくれました。



## ●表彰式は取りやめ

「フルとハーフのマラソン大会を全国で再開させようという方針を会社で打ち出したのですが、その皮切りになったのが8月29日のモエレ沼ハーフマラソンと、この真駒内・豊平川のフルマラソン。参考にできる過去事例はまったくもってありません。社のスタッフとどうしたら開催できるのか必死に頭をひねりました。

必要なのはまず密の回避と考えました。競技には約500人が参加してくれましたが、受付の混雑を避けるためにナンバーカードを事前発送。開会式や表彰式などのセレモニーも取りやめて、走ることだけに特化した大会の運営手順にしました。



▲選手は1ブロック50人が3人ずつで距離を保って17列でスタートする  
▼大会受付では検温、健康管理シート確認が欠かせない（江別・原始林クロスカントリー記録会）  
◀全国皮ぎりのマラソン大会・コロナ対策に苦心した沼田英隆さん

## ●小人数で時間差スタート

これまでは密集状態だったスタート地点は1分ごとに50人が走るウェーブスタート。目印となるポイントを走路に着け、3人ごとに間隔を置いて17列に並んでもらいました。持ちタイムの早い順から並ぶと、同じ走力のランナーが走行中に集団を作ってしまう可能性があり、50人のスタートグループには早いランナー、遅いランナーが混じるような組み合わせにしました。

給水は紙コップを使わずに、小ぶりのペットボトルを給水テーブルに並べ、マイカップへの給水も試みました。ランナーのみなさんはスタート前の待機場所でも、スタートラインへの移動、待機でも実にスムーズに動いてくれ、混乱はまったくといっていいほどなかったですね。

8月のモエレ沼も同じスタイルで運営しましたが、真駒内のスタジアム建物室内はトイレ利用を除いて、立ち入り禁止とし更衣室は用意しませんでした。手荷物預かりも屋外の競技場内に設けて、セルフで出し入れする方式。ランナーの皆さんには不便をおかけしましたが、クレームはなく『こんなときに、やってくれてありがとう』と言葉をかけていただいたのは、本当にうれしかったです」



## ●検温、手指消毒しっかり

道内ではこの大会以外にも、道北の和寒町と比布町でスキー場ゲレンデを使ったヒルクライムレース（9月13日、10月18日）、江別市民限定のクロスカントリー記録会（10月4日）、サーモン駅伝（10月11日）、作AC真駒内マラソン（11月1日）札幌テレビ塔の階段442段を駆け上がる垂直マラソン（11月3日）、さっぽろさよならマ